二次元ぷち文庫

レッスルエクセレント

WRESTLE EXCELLENT

神楽陽子

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『レッスルエクセレント』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

WRESTLE EXCELLENT
レッスルエクセレント
神楽陽子
表紙／秋月からす
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

中江麻衣（なかえまい）

女子プロレスの興行団体「スラッシュキャット」にて、エクセレント麻衣の名で人気を集めるエースレスラー。美貌と実力で幅広い層から人気を集める。

西北野（にしきたの）

前任の興行主より、「スラッシュキャット」の運営を任されている男。

美佳（みか）

麻衣の後輩。まだ実績を出せないでいる新人女子レスラー。

螺旋（らせん）のアリジゴク

筋肉隆々で百八十センチ超の巨体を持つパワーレスラー。エクセレント麻衣のライバル。

熱気と歓声の渦巻く会場、東西南北からスポットライトを重ねて青白く浮かび上がったリング。薄闇の中で幻想的に輝く舞台の上でふたりの女子レスラーが睨みあう。

カーン！

と、ゴングの音がけたたましく響いた。拳ふたつ分はある身長差で圧倒するように詰め寄ってくる大柄なレスラー、その豪腕を右に飛び退いて身を低く避ける美女。

「ったあ！」

ワンステップで敵のラリアットをくぐり抜け、背後を取るや、斜め上の延髄に鋭く手刀を放つ。チョップは正確に的を捉え、大女が短く呻いた。

実況のマイク音声に増して観客が沸きあがる。

『エクセレント麻衣の先制！　チョップがクリーンヒット――』

「ワァアアアア！」

リングネームはエクセレント、興行団体「スラッシュキャット」の花形女子レスラーである中江麻衣。彼女は猫科の動物のようにしなやかな足取りで敵レスラーとの間合いを計り、細く剃った美眉をキリッと寄せて相手を威嚇した。

透明感もあっていっそう輝く黒い瞳。長睫毛が目尻の角度を強調し、表情は自然と豊かである。比較的高い位置にある鼻は筋がすらっと美しく、それとは垂直に引き結ばれた桜色の唇には、負けるものかという強い意志が感じられる。

引いた顎が逆三角形のラインで相貌を引き締めた。

「さあ、いくわよ！」

腰まで降ろした栗色のストレートヘアをマントのように翻すや、弾丸のような瞬発力で風を残して突進し、真正面から大柄なレスラーと両手で組みあう。

今日の対戦相手は「螺旋のアリジゴク」、盛り上がった筋肉で全身を固めたパワータイプのレスラーだ。単純な力勝負は不利と見て、故意に左腕だけから力を抜き、アリジゴクを前のめりにさせる。

そこをすかさずニーキックで一撃。

「がはあッ⁉」

相手がパワーならこちらはテクニック、そしてスピードだ。麻衣は敵レスラーの巨体を登るようにして相手の右腕を捻りあげた。

四方のスポットライトが焦点を合わせ、技の冴えを称えるように彼女を照らす。真紅のボディスーツにはエナメル加工が施されており、ギラギラと光をうねらせて、遠目にも腰の捻りまで明瞭だ。

ボディスーツは胸元から背中を大きく空けた、ストラップレスのビスチェ。アリジゴクの豪腕を細身で最大限に締め上げるべく、背を弓なりに伸ばすと、胸も反れて二個の峰乳が輪切りレモンの形に上向いた。

身を反らすほど、ビスチェのバストラインから果肉が零れてしまいそうである。上半身の体積の大半を占める肥大な胸肉が、細身の上で重感たっぷりに揺れ弾み、麻衣自身の肺を圧迫する。双乳の下線をなぞるようなデザインラインも曲線を強調する。

業界では「水着」とも呼ばれるボディスーツは、肌にぴっちりと吸いついており、見た目そのままに女のラインが浮かび上がった。女肉を丸く実らせた胸の下で細く際立つ柳腰は並みの男性でも片手で抱き込めそうだ。

ボディスーツは股間部のカットが鋭く、半端な水着よりも挑発的である。腿の接合部をぎりぎりまで晒し、尻布は谷間を最小限に隠すのみだ。

尻の脂肪は弛むことなく、熟れたリンゴのように形よく引き締まり、厚い太腿にも贅肉感は欠片もない。弾むほどムッチリと脂を乗せながら、若々しい張りに満ちた肌が、ヒップに独特の丸みと太腿の微妙な曲線を維持している。

脚にはビスチェと同色のブーツを、紐で何段にもX字に括り、外れないようしっかりと固定してある。両手首のリストバンドも赤一色。

エクセレント麻衣が気合を込める。

「っはぁあああッ！」

レスラーとは思えぬほっそりとした腕の、どこからそれだけの力が出てくるのか。大柄なアリジゴクが関節技の締まりに顔を顰める。

「この……調子に乗ってんじゃねえぞ！」
こちらがプロなら相手もプロ、アリジゴクが捻りあげられた右腕もろとも麻衣をリングに叩きつけようとした。
「――そうはいかないわ！」
その寸前でエクセレント麻衣は関節技を解いて、倒立姿勢で着地し、そのまま相手の顔面にドロップキック。綺麗な弧を描く両脚蹴りに客席が沸く。
「そこだっ、エクセレント麻衣！」
「アリジゴク、螺旋の根性見せてやれー！」
だがアリジゴクはのけぞるも、身を起こして持ち前の重量を武器に突撃してくる。左右の豪腕が間断なくジャブを繰り出した。
「っく！　なかなかやるじゃない」
「このアタシがやられっ放しでいると思うか？　ハッハー！」
モーションが大きく隙は見えるも、拳の一発一発が重く、さすがのエクセレント麻衣も防戦一方だ。脇を締めてガードを固め、連打に耐える。
そう長くは続かない、アリジゴクも疲れを見せ始める。次の拳打で速度が落ちると直感した麻衣は、いちかばちか、前傾姿勢で敢えて前に飛び出した。
ブンッ！　と風を切るも、アリジゴクの左腕は空振り。同時にバランスを失った彼女の

がら空きの脇腹に、エクセレント麻衣が真横からエルボーを打ち込んで、
「っいくわよ！」
打撃の反動にフットワークも乗せてロープに背を預け、宙に飛ぶ。ライトの光を浴びる肢体の伸びやかなシルエットに観客が目を眩ませた。
マロンブラウンの髪を回旋させて身を捻り、加速に遠心力も加えたローリングソバットが、ダメージと疲労から立ち直れていないアリジゴクの気管にクリーンヒットする。
「がはあっ⁉」
「――チャンス！」
そのままアリジゴクの背後まで飛んで、背中から腹に両腕をまわし、着地でリングを踏み締めると同時に十八番のスープレックス。
自分よりふたまわりも大きな対戦相手を、下肢のバネをたわめて反り身に乗せ、溜めた力が爆発する瞬間、我が身を「つ」の字になるまで大きく反らす。
「うっらぁあああああッ！」
アリジゴクの巨体が浮きあがり、青いリングに後頭部から急落下した。
ガッタ――――ン！
マットを揺るがすほどの衝撃と炸裂音、華麗な投げ技に観客が熱をあげる。
「ウオオオオオオ！」

実況も興奮気味に解説した。

『決まったぁ！　エクセレント麻衣の必殺ジャーマンスープレックス！』

アリジゴクは呻くばかりで立ち上がれず、３カウント、ゴングが試合終了を告げる。

カンカン、カァン！

エクセレント麻衣の勝利だ。

「はぁ、はぁ……いやったぁあああ！」

息を乱しつつも、満面の笑みとガッツポーズで声援に応える。背筋を伸ばして右腕を振り上げると、反動でたわわな乳房がぶるんと弾んだ。

ギラギラとした赤いボディスーツとは対照的に色素の薄い肌は、しっとりと汗をかいて瑞々しく、照り具合は出来立ての茹で卵のようだ。レスラーだけにしておくには惜しい美貌とグラマラスな肉体で、グラビア誌の表紙を飾ることもしばしばである。

「みんな、応援ありがとう！」

エクセレント麻衣は感謝の気持ちを込め、ファンたちにチュッと投げキッスを贈った。

☆

熱気の冷めやらぬうちに麻衣は会場をあとにし、控え室で着替えを拾ってからシャワールームに向かっていた。ただでさえリングの上は照明が集中して暑いうえ、全身を駆使する格闘だ、多汗の気がなくとも一試合終わればびっしょりである。いますぐにでも背中の

紐を弛め、ビスチェの裏に冷たい空気を送り込んでしまいたい。

「ふう……」

しかしスポーツの汗は精神的に心地よいものだ。今日の興行が大成功に終わったのも嬉しい、ファンの期待以上の試合を見せることができた。

プロレスは単純に勝てばよいものではない。競うのは「勝敗」ではなく「技」だ、それこそがプロレスの醍醐味である。

今日の対戦相手、螺旋のアリジゴクはパイルドライバーを必殺技とするレスラーだ。仮に勝つだけでいいのなら、わざわざこちらから危険な接近戦に持ち込んでスープレックスを狙う必要はない。

だが、そこを敢えて取っ組みあい、自分のもっとも得意とする技でフィニッシュを決める。勝敗とは別のベクトルが作用した手の内を読みあい、読みきって持ち技を繰り出せた時の快感。これがたまらないのだ。

また、プロレスファンもその攻防が観たくて会場に足を運んでいる。ジャブやキックの連発で味気なく勝つだけの試合はつまらない、「魅せる試合」でなければ。

エクセレント麻衣は得意のスープレックスで華麗なフィニッシュを飾るレスラー。そうでなければ自分が納得できない、ファンも納得しない。だからこそ、相手が誰であろうと麻衣はスープレックスを必ず狙う。

押し込まれても終わらず、引き抜かれた分だけ出口が段刻みに捲れ、麻衣本人は望まずとも排泄の恍惚をそのまま無限に再現する。

「うはぁ、んく……ひぎぃい！」

名レスラーはしなやかな肢体をのけぞらせ、快楽にいまにも弛みそうな頬を引き締めるよう、奥歯を噛み締めた。顔は耳まで上気して、眉間は離れ、伏せた睫毛の下では双眸が恥辱の涙を溜めている。

背を反らせると栗色の髪が真っ直ぐ幕を下ろし、長椅子から浮いた峰乳が飛び出すように弾んだ。疲れた麻衣にはずっしりと感じ、バランスをまたも崩したところを逃さず、アナルビーズが深く潜行してくる。

ズブズブズブ……！

「あっひぃいい⁉」

紐で繋がれたビーズは無理なく蛇腹状の直腸を突き進んだ。のみならず、腸内で二個のローターを攪拌（かくはん）する。

コードが絡むほどにローターが二転三転し、同時に攪拌玉となって腸粘膜を無茶苦茶にかきまわす。並行して肛門出口ではビーズを抜き挿しされる。

麻衣は内股筋を引き攣らせ、八の字に開いた太腿の脂肉をぷるぷるとさせながら、玉の汗を淡く火照った尻に流して悶絶した。

ちょっとシーン 試し読み ピンポイント!

「ひはぁ！　んっくう、や、やめ……あう！　んぐう」
回数を重ねるごとにビーズの球がぬっちょりと濡れ、粘りを引く。冷たかったローターも体温を吸収し、存在感はそのままに電動を続けた。
まるで腸内をまったく別の生き物が複数泳ぎまわっているかのようだ。が、おぞましさよりも、粘膜器官で炸裂する悦痺れに意識を奪われる。
（こ……こんなの、で……ッ！）
細腰がビクンと跳ね、双乳を弾力豊かに揺らす。
悶える豊満な肉体にあてられてか、両隣のヤクザが目を血走らせた。
「へっへっへ、西北野さん。俺たちもいいっすか？」
「好きにしろ。この女はレスラーだ、多少乱暴なくらいがちょうどいい」
男ふたりが蜘蛛の足のように指を立て、Eカップサイズの美乳をそれぞれ鷲掴みにする。
獣が餌を丸かじりするかのような、食い込む指の動きに捕らわれ、綺麗な輪切りレモンの形がムニュウと歪んだ。
「あっはぁあ？」
自分でも信じられないほどの春声が咽の奥から迫りあがり、灼けた吐息を散らす。肛虐によって感度を増した肉体は、乱暴な搾乳にも見境なく反応し、胸肉は乳悦の火を灯して疼きの芯を硬くしこらせた。

真紅のビスチェにかろうじて隠れた乳頭が、ビンビンに血を漲らせ、破廉恥な形に突き勃つ。極薄のボディスーツに陰影が浮かび上がる。

「この女、もう乳首おっ勃ててやがるぜ。そんなにケツがいいのか？」

右の男がボディスーツの上から、小さくとも自己主張の激しい尖塔を抓った。集中する痛痒感に肉釣り鐘が麓から俄かにざわめく。いからせた肩から力が抜ける。

「ぐ！　にし、きたの……や……やめなさい……ッ！」

咽を絞って拒絶の言葉を吐き出すも、声にはまるで張りがなかった。顔の筋肉が弛んでしまったかのように眉が吊り上がらず、唇も締まらない。心ならずも悪趣味な陵辱で感じさせられる悔しさに麻衣は涙の膜を揺らめかせた。

その瞳に美佳を映す。

弱くなった心を追い詰めるかのような、同性、それも後輩からの申し訳なさと憐れみの入り混じったまなざし。目と目を合わせることもできず顔を背けてしまう。

（み……見ないで……）

萎縮した心を容赦なく肛虐が打ちのめす。

「フフフ、大分具合がよくなってきたんじゃないですか？」

直腸はむしろ排泄時以上に活性化し、挿送が粘音を伴うほど大量の蜜を分泌した。

ヌチャッ！　ヌチャッ、ヌチャヌチャヌチャ！

また、西北野が巧みにリズムを乱し、刺激を求める快楽神経を焦らす。彼が腕を止めると、麻衣の汗ばんだ尻が滑稽なほど打ち震え、拒絶は切迫へとすり替わっていく。バイブレーションする二個のローターはビーズによってS字結腸へと運ばれた。

「あっあぁう、んふう……ひあ、と……とめて……！」

命令形だった口調が懇願になる。結腸孔が熱源と化して、直腸に快美のマグマを煮え滾らせる。灼熱がビーズに引きずられて激しくうねり、出口では際限なくかりそめの開放感が連続する。排泄器官は巨大な性感帯へと変貌を遂げていた。

渦巻く直腸はさらに性感の中枢神経、子宮を絞りあげ、牝本来の官能も肛悦の昂りに拍車をかける。薄布の裏で女穴が秘めやかに甘露を湧かせる。

法悦の津波が理性の耐久に亀裂を走らせた。

（だ、だめ……ッ！）

その亀裂から中毒性の高い官能の麻薬が脳に染み込んでくる。思考に霧がかかり、頬を薄赤く染め、屈辱の涙を粒にするエクセレント麻衣。

柔らかな巨乳を鎖骨の高さまで持ち上げられ、破廉恥な突起は薄地越しに両方とも牽引された。ブルブルと乳房全体が痙攣し、重量で肺を圧迫する。

「こんな、の……ま、待って！　いやったら、あぐ……っはあ、あっくあ！」

鼓動のペースが跳ね上がる。さらに西北野が、乳房を引っ張るヤクザとは逆方向に尻布

を引き寄せ、下に隠れた姫割れにクロッチを深く食い込ませた。膣と肛門の双穴が淫ら汁の分泌を競い、赤いボディスーツを下から色濃く染め上げていく。

薄生地の腰から下がベットリと肌に吸いついた。

「ひはあ……ッ！　だ……だめ、はあ――あ！　っくぅう！」

ローター二個とビーズにアナルを攪拌されるのみならず、頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられるかのようなダイレクト感。最初は柔肉の抵抗を受けてぎこちなかったビーズのピストンも、細かい泡を噴き零すほどの潤滑油に乗り、肛門をスムーズに捲り戻す。

「大分よくなってきましたね、ではそろそろ……」

西北野がツマミをまわすと二個のローターが狭苦しい腸内でもがくように暴れ、激烈なバイブレーションを弾きあう。

そこをアナルビーズが、直腸のS字カーブをヌルヌルと行き来し、尾てい骨を叩くようにローターが交互に上下して強力な振動を脊髄に伝えてくる。

燃えるように熱化してうねり、コードまで吸引してローターを転がす粘膜器官、それを必死に制しようとするも、麻衣は肉体の昂りを止められなかった。視界の片隅では美佳が目を見張っているにも構わず。

（う、ぅ……そ……！）

ヌッチャヌッチャと肛門の咀嚼音が、外に漏れるのを聴いて、自分でもはしたなく思う

も、蕩けるような快美感に呑み込まれていく。

「ひぁ⁉　あ……あ、ぁあああ」

牽引される乳頭でも快絶がスパークし、ビリビリと全身を焼かれる。女子レスラーは股座だけで全体重を支えるえびぞりの姿勢で、視界を反転させ、首よりも上で巨乳をぶるんと弾ませた。肛門を突き上げられるかのような力が働いて、さらに身を反り、甘く痺れる女穴も無意識に長椅子に押しつけて求める。

電圧の弾ける粘膜器官に悦痺が殺到した。理性は砕かれ、意識の混濁を洗い流す恍惚に脳裏を真っ白に染め上げられる。

エクセレント麻衣を打ち上げるアナル絶頂。

「あっはぁあああぁぁぁあああああああああああああああ！」

ビーズを咥え込む肛門が緊縮を極め、魚でも釣り上げるかのようにローターのコードをズルズルと吸引する。快楽神経にばらまかれた淫らな痺れは肌にも伝播し、心ならずも麻衣は肉悦に打ち震えた。

クロッチの裏面を臍の高さまでじわじわと熱い汁が這い上がってくる。股布に塞がれて出損ねた女壺からの噴水だ、肉体の絶頂を知るも、達したまま降りてこられない。

張り詰めていた四肢の筋から力が抜けた。

（いや……こ……こんな――――――！）

ないも同然のマスクの裏では美眉が目尻に傾いて、半眼がちに瞼を伏せ、溜まった涙を端からぼろぼろと零した。赤く茹だった頬を最大限に駆使して、灼けた吐息を吐き出しては、ヌラリと光る舌を宙で旋回させる。

量感に弾む巨乳を押し揉まれ、肛門深くには電動ローター、開通して間もないヴァギナには肉杭を硬く打ち込まれ、そして、同性ならではの的確なクリトリス責め。悦びの波紋に波紋が重なり、子宮から甘い痺れが血液同然に全身を循環する。

甘美な肉悦に脳がトロトロに溶かされていく。

「あ……はぁ、い……いや、こんな……アソコが壊れ、ひあ、っはあ！」

観客も詰め寄って次々と逸物を取り出し、悶絶する覆面レスラーに砲身を向けて一斉に自慰を始めた。

「これだよ、これ！　ハア、たまんねえ！」

「この席でよかったぜ、おら、俺のもたっぷり味わいな！」

近い男からペニスを問答無用になすりつけてくる。ヤクザの指に代わって、分厚い肉棒がひっきりなしに双乳を転がし、乳頭を狙って弾く。

マスクを被った顔にも青臭い腐肉を寄せられ、勃起ペニスの身勝手な乱暴さを思い知らされた。ビンッと跳ねて頬を打ち、すらっとした鼻筋も歪められる。回数を重ねるごとに男根はますます猛り、赤々と腫れて淫らに痺れる亀頭を無遠慮にぶつけてきた。

ちょっと試し読み！ヒーガイ！

「スケベなカラダしやがって、淫乱なレスラーが！」

無力にも衆人環視の中で犯され、下卑た欲望のはけ口にされる屈辱。

（だ……だめ、どうにか、なっちゃう……）

だが、それ以上に女の多感な心を揺さぶられる。トレードマークでもある真紅のボディスーツの、面積の少なさを恨めしくさえ感じ、犯されるままにいやらしい声で喘ぐばかりの自分の中で羞恥が炎をあげた。

汗を吸ったビスチェが弾む肢体を締め上げ、牡蜜に濡れたマスクも顔に貼りつく。覆面の一対の穴から覗く双眸が涙ぐむ。エクセレント麻衣が神聖なるリングの上でこうも無様に陵辱されるとは。

「ひや……違ぅ、違うの……いぁあああ」

そうして弱った心を切り刻む快感。

（嫌、なのに……！）

淫らな本能が肉体を完全に制圧し、ついに理性は抵抗を打ち砕かれる。秘壺が襞と襞を寄せあうようにしてミッチリと男根を食い締めた。

ヌチュッ……ズチャッ！　ズチャッズチャッズチャッ！

淫猥な粘膜摩擦を最大限に拾って快楽神経に電流をスパークさせる。ローターを仕込まれた直腸も激しくうねって自己主張し、振動そのままに暴れまわる。

「んふぁ！　ひっや、らめっ、あふぅううッ！」

淫らな気配にあてられたのか、豆粒大に膨満した真っ赤なクリトリスをしゃぶりあげる美佳に積極性が見え始め、疼きの芯を絶え間なく練磨する。

肉体はいやらしく変貌し、刺激がないと逆におかしくなってしまいそうだった。西北野がピタリと腰を止めるや、もどかしさが強迫観念にもなって、麻衣を葛藤の袋小路に追い詰める。欲してはだめ、それでも欲しい、と。

「どうですか、アテナさん。我慢できなくなってきたでしょう？」

暗示にかかるがまま、秘壺が潤いを増して切迫する。四肢もガクガクとする。

（も……もう……だ、め……）

女穴からの、性感の本流を堰き止められ、とうとう焦燥感を抑えきれなかった。

わななく唇から本音をぽつりと吐露する。

「は、はぃ……」

うすら笑う西北野がうなじに顔を寄せて囁く。

「どうして欲しいんです？　さあ……皆さんにも聴こえるように」

「――してくださぁい！」

悪党の言葉が終わらぬうちに麻衣は叫んでいた。焦らされた分だけ膨張したリビドーを爆発させる。

「欲しいのお！　もっと……もっと突いて、レイプ……レイプしてぇ！」
「フフフッ！　いいでしょう、たっぷり犯してあげます――よ！」
欲するままに肉壺に雪崩れ込む淫悦。性感が途切れたのはたった数秒のはずが、何時間と待たされたかのようだ。感極まって卑猥な笑みを浮かべる。
「んぁはあぁ……！　オ……オマ○コ、いっぱひ……んはっ、はぁ！」
突き破らんばかりのピストンを歓迎して、膣襞は蠢きを加速し、裏では直腸がローターを転がすように激しく蠕動する。窄まる肛門もコードを貪欲に引っ張った。先輩レスラーの愛蜜を顔じゅうに流しながら、美佳も口奉仕に熱を込め、剥き身の肉豆を練磨する。
「そ、そこぉ！　はあ、舐めて……もっと舐めて！」
自分が気持ちよければ彼女がどうなっていようが構わなかった。
観客の嘲笑がレイプ会場に響き渡る。
「ハッハッハ！　スケベなレスラーもいたもんだ！」
「ハメられて悦んでやがるぜ。真性のマゾだな、この女」
疑うことなく麻衣はすべてを鵜呑みにした。
「は……はぃ、私は……スケベで、んふう、マゾのレスラーれす……んはあ、あ？」
ぼそぼそと西北野に耳打ちされるまま。
「はい、淫乱チンポが大好きな……え、エクセレント……麻衣、はあっ、いつもチンポの

ことばかり考えてる、へ、変態の中江麻衣ですぅ！」

覆面レスラーは正体を明かし、だらしなく開いた唇の両端から涎を垂らす。

かりそめのマスクに腐肉をグイグイと押しつけられた。

「やっぱり麻衣ちゃんかよ。覆面してまでレイプされたがるなんて変態だな」

「はい、変態……麻衣は変態なんれす、だから……あっふぁぁ、もっとひて……たくさんもっと、あっぷ、もっとしてぇえ！」

秘壺を穿る肉杭が捻りも利かせて速度をあげた。肉唇を捲り返して溢れる粘性の発情汁が、白濁を湧かせ、あられもない太腿と青いリングを汚していく。

右半分をはだけられたビスチェから零れた乳肉も、波のように寄せては返す剛直の群れに揉まれ、しこり勃つ乳頭をピンッと弾かれる。

「ひあはぁあん！　イイ……レイプチンポ気持ちイイのお、んあっふ、あ！　気持ちよすひて……はぁっイっちゃう、こんなの……はぁ、んふあ！」

鼻先に立ち込める腐臭を堪能しながら、麻衣は栗色の髪を大きく翻し、ロープで硬く拘束されているにもかかわらず、西北野に繰り返し汗みどろのヒップを差し出した。粘着質の肉洞と熱硬いペニスの摩擦の幅を、可能な限り広げて悦ぶ。

ズチャッズチャッズチャッズチャッズチャッ！

淫らな掻痒感を上まわる高速ストロークで官能を高めていく。脳裏が漂白する。子宮が

グツグツと煮え、淫熱が汁とともに肉唇の合わせ目から溢れるかのようだ。
「も、もぉイク――ひ、イっひゃうぅうううッ！」
男たちも手淫を速め、張り詰めた怒張をエクセレント麻衣に向ける。
過熱する子宮で閃く悦痺が瞬く間に全身に波及した。肛門がコードを見えなくなるまで吸引し、汁気たっぷりに肉棒を熱く締めつける秘壺も、渦巻くように収斂する。
ありとあらゆる快楽神経で火花が弾けた。
「ひあっはぁあああぁぁあああああああああああ――――――！」
四肢を、感電したかのような痙攣が走り、麻衣は絶頂へと打ち上げられる。ローターを肛門に仕込まれた女子レスラー本人の凄絶なバイブレーション。膀胱を鷲掴みにされでもしたかのような勢いで結合部から潮を散らす。
ブシャアアアアアアア！
後輩の存在も忘れてエクスタシーに打ち震えるエクセレント麻衣。
「きゃふっ⁉」
「んはぁあああ……ッ！」
マスクの隙間で瞳を蕩けさせ、恍惚の笑みを浮かべた女子レスラーの顔面に、四方から夥しい量の陵辱液が降り注いだ。
ビュクッビュルビュルビュル！　ドプドプドプッ！　ビクビクビク！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/